

学習環境としての SNS の価値 ー パンデミック下での学び合いを考察する ー

齋藤智美（早稲田大学）

SNS the worthy learning environment: On learning from others under a pandemic

Satomi SAITOU, Waseda University

要旨：本研究で対象としているのは、書くコミュニケーションのための日本語科目である。SNS のグループでやりとりし、そこに現れる誤用を教室で協働的に訂正することを通じて関係性が構築され、それがやりとりの内容に作用していく。しかし、パンデミックによりクラスは全面 Online となり、関係性構築の面で Social Networking による学びにどう影響するのかが危ぶまれた。分析結果として、パンデミックによる行動制限が、負の方向の影響はなく、むしろ、制限があるからこそ SNS をコミュニケーションの場として意識化し、やりとりの増大につながっていたことがわかった。パンデミック下の学習環境の観察により、SNS 利用の更なる可能性が示唆された。

キーワード：SNS、書くコミュニケーション、学習環境、パンデミック

1. 概要

1.1 科目概要

科目「SNS と会話で学ぶ日本語 ~Communicative Japanese through SNS~」は、2018 年度春学期に開講した。現代社会では Social Networking System（以下 SNS）の利用が活発になり（総務省 2019）、日常のコミュニケーションメディアとして、特に若年層では生活に欠かせないものとなっている。しかし、従来のフォーマル学習においては、書く技能は作文やレポートとして産出するものによっており、コミュニケーションを主眼として書くことを扱う科目は所属校には無かった。今や SNS は通話よりも手近なものであり、書くコミュニケーションの充実は生活の質とも関係すると言える。日本語学習者にとっても日本語での SNS は社会生活環境であり、また、学習環境として働くものである。そこで、書くコミュニケーションが豊かなものとなるよう、ことばのプラクティカルな学びを目指し、科目設計をした^①。

^① なお、シラバス上の到達目標は、1)伝えたいこと、話したいことを日本語で表現することができる。2)メッセージを読んでコメントを書いて、やりとりできる。3)内容について口頭でやりとりを続けることができる。4)活動を通して、必要な文法・語彙を身につけコミュニケーションできるようになる。の 4 点である。

1.2 授業概要

本科目は定員 35 名で、毎週木曜日に 1 コマ、15 週間のクラスである。初級前半および後半レベルを対象としているが、実際の履修生は全くの初心者から上級レベルまで幅広い。クラス全体で集まるのは週に 1 コマだが、それまでにほぼ毎日 SNS でやりとりが行われる。まず木曜夜までに各週 2～3 人が、Original Poster としてメンバーと話したいことを書き込み、それに対して全員が任意に Reply する。Reply は Original Poster だけに向けたものではなく、誰にでも自由にネットワーキングする。このやりとりを火曜の午後まで行い、ここで現れた誤用を抜き出して加工したものをフィードバックシートとした。そして次の授業回において、毎週およそ 15～30 程度の文や語彙の誤用訂正を課題として数名で協働的に試み、授業の後半に、全体でなぜ誤用なのかを文法、語彙および表現のバリエーションとともに共有する。この一連を繰り返し、コミュニケーションとしてふさわしい表現を考え、学んでいく。伝えたいことを表現しながら学ぶ、オーセンティックな実践である。

1.3 システム変更とパンデミックによる授業の Online 化

2018 年度春学期の開講当時、学内の LMS は CourseN@vi というもので、ツリー状に書き込める掲示板機能があった。これは画像や映像もサムネール表示されるなど、既存の商業 SNS の代替として使うことが出来たが、欠点としては、ログインしてからその機能にたどり着くまでに 7 回ほど階層を開く必要があったことである。2020 年度からは LMS の変更があり、SNS 的な機能は無くなったために商業 SNS^②の利用を余儀なくされた。しかしこの変更は、アプリでの簡便なやりとりを齎した（図 1）。

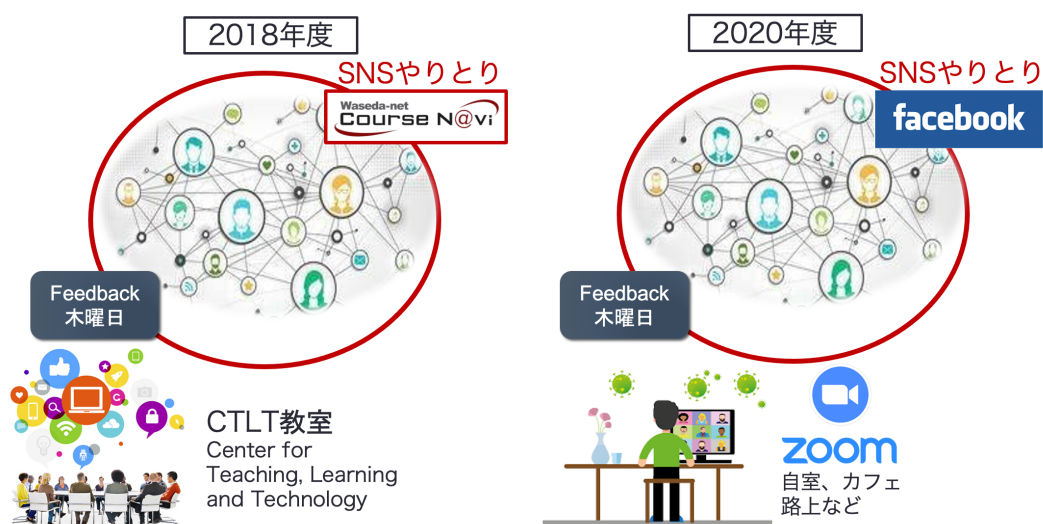


図 1：授業の環境変化

^② これは LMS と異なり、プライバシー保護やセキュリティの面で問題がある。そのため、アカウント取得の際に出来る限りの防御を行なった。

2020 年度はシステムの変更に加え、パンデミックによる行動制限がかかり、教室で行なっていた授業は Zoom を介することとなった。画面越しに対面するとはいえ、生身ではないことと発言制限が生じる点において、通常の対面とは異なる。つまり、SNS の媒体と授業時間が Online 化するという二重の変更が起こったわけであり、学習環境への影響が正であれ負であれ生じるものと予測された。

2. 先行研究

齋藤（2019）では、この科目で履修生が「何をどう学んだのか」を分析している。その結果、レベル差に拘らず、文脈や関係性に沿った文法表現や語彙の理解を得たこと、日本語使用への躊躇いが軽減したと自覚していることがわかった。そして、言語の形式面のみならず、クラスメート同士の関係性の中で学び合いながら、互いの様々な考えや考え方を知ることが重要な学びだと捉えていることが明らかになった。SNS という場合は、まさに Social Networking として学びを創発していると言える。

3. 研究の動機および目的

1.3 で述べたとおり、2020 年度は Online(SNS)+直接対面（教室）の構造が Online(SNS)+Online（Zoom）となった。ここで心配されたのは、生身で会う機会の喪失が、互いの関係性構築の障碍になるのではないかということである。そうであれば、SNS のやりとりが縮小、すなわち接することばも発することばも減る可能性がある。週に 1 回、教室では、近くに座った者同士で文法や語彙、表現について小さな討論が起こり、離れた場所に座っていても様々な質疑応答などの発話を通して、その人となり SNS での書き込みと重ねて印象付けられていく。しかし Zoom というアプリケーションでは、誰かが発言している時には他は皆聞き手になるという特徴がある。サイド発話は Online 授業では生まれにくいことは舘岡（2020）などでも指摘されているように、小声で隣の人と話すことが出来ない。ブレイクアウトルームで少人数に分けても、発話の不自由さは同じである。また、アレン曲線は Online であっても距離とコミュニケーション量には負の相関関係があると報告されているが（ウエイバー 2014）、一方、依頼は対面の方がメールの 34 倍の成功率がある（Bohns, 2017）というように、対面のコミュニケーションの方が意思疎通がはかりやすい。

以上の懸念から本研究では、パンデミック下で全面 Online になったことが、クラスメートとの Social Networking による学びに影響するのか、何が関係性構築に関わるのかを探るものである。

4. 分析と結果

4.1 分析対象

分析の対象とするのは、2018 年度と 2020 年度それぞれの春学期と秋学期の SNS への

書き込み数および、7週目に実施した振り返り活動の自由記述文である。

4.2 結果：書き込み数の変化について

まず、やりとりが停滞したかどうかを調べるため、2018年度(n=63)と2020年度(n=60)のSNSの全Reply数を比較した。結果は2845:6772で、一人当たり平均にすると45:116.5となり、全面Onlineの方が多いが、これはSNS媒体を変更した影響が反映したと考えられる。LMSとアプリで利用可能な商業SNSでは、UXにおいて大きな差がある。そのため、このReply数をもって単純にやりとりが増えたと言うことはできない。しかし、全面Onlineになったことが原因でのやりとりは停滞はなかったと言える。

4.3 結果：学びの内容の変化について

2.で述べた2018年度クラスを分析対象とした齋藤(2019)の結果と比較するために、学期開始7週目に実施した「活動振り返りシート」のうち、「うまくいったことは何か、その理由は何か」という設問に対する自由記述を計量テキスト分析^③した。その結果、両年度の記述に大きな違いは見られなかった。つまり、「何をどう学んだのか」はクラスメートとのやりとりを通して文法や表現を学んだ、互いの考えや考え方を知ることができた、互いに学び合ったという結果であったわけである。以上のことから、学びの内容についてはSNS媒体の変更と全面Online化は影響していなかったと言える。

4.4 結果：学びの環境の変化について

次に、全面Onlineとなった2020年度の春学期(n=33)と秋学期(n=27)を比較したところ、顕著な違いが現れた。まず、一人当たりの平均Reply数は、春学期は95.9回、秋学期は137.1回と増えていた。Onlineシステム環境が同じであるにもかかわらず、やりとりが増加した要因は何か。そこで4.3同様、春学期と秋学期の学びの内容について定量テキスト分析を行なったが、ワードクラウド、階層的クラスタリングともに特徴的な違いは現れなかった。

しかし語の出現頻度に異なりが見られた。春学期には現れなかったが、秋学期には「会う」「会える」「環境」「オンライン」といった語が出現していたのである(図2)。これらの語の共起文脈は「SNSのクラスでみんなに会える」「互いに会えないからこの活動は特別に価値のある経験」「人に会うことが困難なOnline環境でもSNSで日本語を話せる」などで、パンデミック下の生活の反映が見られた。これに関して授業中の雑談の中で明らかになったことだが、秋学期の履修生の中には、他の科目は全てオンデマンドであり、このクラスが唯一、クラスメートと会えるという者や、他のZoomのリアルタイム配信クラスであってもビデオとマイクはオフに設定されるために話す機会はないという者など多い

^③ UserLocal テキストマイニングツールによる

た。

20春にだけ出現	両方によく出る	20秋にだけ出現
テーマ 速い 長い 考える コミュニケーション 単語 向上 簡単 受ける 間違う 優しい 堅苦しい 嬉しい 気まずい 興味深い 詳しい 間違えやすい 増える 書ける 答える	いい 日本語 できる クラスメート sns 良い 面白い 書く 思う 少ない 文法 知る 授業 勉強 学ぶ 新しい 交流 機会 毎週 言葉 すごい いろいろ 会話 わかる 違う 文章 間違い 持つ クラス リプライ	うまい 小さい 正しい つまらない よい 直す 改善 自然 重要 会う 得る おかげ ほか やり方 オンライン ポジティブ 使用 文化 気持ち 環境 知識 つける とる まく まなべる 会える 出会う 出来る 増やす 役に立つ

図 2：2020 年度春学期と秋学期の特徴的出現語

つまり、学びの環境とは場所やツールという物理的なものだけではなく、状況そのものであることが示唆される。

5. 考察：学習環境としての SNS の価値

2020 年度春学期は、Online 授業という未曾有の事態に突入し、教員も学生も試行錯誤であったと思う。それから夏季休暇期間を経ての秋学期も、国や地域によって異なるとはいえ、行動制限のかかった生活が続き、日本語言語使用の場も自由にアクセスしにくいまま、授業も全面 Online で継続されることとなった。このように従来のコミュニケーションが困難な状況において、学びの継続を指向する者が偶然の組み合わせでメンバーとなり、SNS でやりとりを続ける。続けていくうちに、そこに学び合いがあることに気づき、SNS はことばを交わせる場としての価値を持ち、ことばが生まれる環境としての意識化が、結果から理解できる。そして、ことばを交わす環境の保持、および環境を希求することは、学習を促進しようとする重要な普遍基盤であることを示している。

また、学び合う関係性とは、互いが互いの全人的リソースとなっているということもできる。しかし、関係性とは環境であると捉えた場合、その構築に関わる要素はリソースという概念では狭く、生態学的な関係子と見た方が妥当である。本研究で見られた結果は、パンデミック下の特異なものではなく、むしろ、わかりやすく全員が共通の状況におかれたことにより、環境を希求する要素の存在が明示された。就いては、関係子の最大公約数が関係性構築に関わる要素であると考えられる。学びのコミュニケーションをすすめる上で、すすめる中で、科目運営を動的に図りつつ約数を採掘していくと助けになるであろう。

SNS のやりとりは、行動制限の有無によらず、いつでもどこでも可能である。そして共感したり驚いたりしながら、表面的な楽しさに留まらずに学びの面白さを獲得していた。今回、SNS は学習環境として価値があることを見てきたが、さらに様々な利用法と機能を有している可能性がある。

5. 今後の課題

結果として、この科目では Online 化による負の影響はなかったと言える。むしろ、授業が全学全面的に Online 化したことにより、ヒトと交わることを希求し、それが意識化され、コミュニケーションが密になった。SNS でのつながりを、ことばの学び場と捉えることは、言語形式の面だけではなく、コミュニケーション全般に関わるものであると考える。

パンデミックの影響によって我々の環境や価値観がどう変化するかは捉えづらいが、今後も更なる技術開発や教育観とともに Online の学びは展開されていくはずである。これらに資するよう、メディアの心理的距離という側面から学びに関わる要素を整理していく必要がある。

参考文献

- 齋藤智美（2019）「SNS が創発することばの学び—状況の Authenticity とリソース性について—」『早稲田日本語教育学』第 27 号
- 総務省（2019）『情報通信白書』
- 館岡洋子（2020）「日本語教育実践研究（9）」『早稲田日本語教育学』第 29 号
- ベン・ウェイバー（2014）千葉敏生訳『職場の人間科学：ビッグデータで考える「理想の働き方」』 早川書房
- ユーリ・ブロンフェンブレンナー（1996）『人間発達の生態学：発達心理学への挑戦』磯貝芳郎、福富護訳 川島書店
- Thomas J Allen（1977）Managing the Flow of Technology :MIT Press
- Vanessa K. Bohns（2017）A Face-to-Face Request Is 34 Times More Successful Than an Email: Harvard Business Review